「て」の接続機能

半藤英明

一、文脈依存の「て」

接続助詞「て」については、山口堯二（一九九六）が「前件と後件をただ並列するというぐらいの関係表示しかせず、その具体的な意味関係の理解は文脈にゆだねる傾向が強い」（27頁）としている。例文で確認する。

・あれだけ調べて、まだ訊き足りないことがあるのか。
（森村誠一『空洞星雲』）

・翌々年には赤いざらめが配給になって、漸く餡が甘くなった。
（半藤末利子『夏目家の糠みそ』）

どちらの「て」も「前件と後件をただ並列する」もの、即ち、情報の移行を単純に示すものと考えることができる。意味的には「そして」という程のものに相当するだろう。

しかし、前者の例文の前件は「あれだけ調べたのに」という逆接の意味にも解釈できそうである。後者の例文の前件は「赤いざらめが配給になったので」という原因・理由の意味にも取れそうである。その構文として文意が確定されない以上、そのような「て」の意味的な働きは、なるほど文脈への依存度が高いとも言える。この点、山口堯二（一九八〇）には『「て」の接続表現には他の接続形式との関連において、ほかにもさまざまな意味関係が文脈上両立して認められることがある』（258頁）ともある。然れば、そのような接続助詞「て」の働きは、意味的に極めて消極的なものであると考えられる。

しかしながら、次例はそのようには考えにくい。

・黙って考える。

・座って食べる。

・走って来る。

それぞれの意味は「黙ったまま考える」「座ったまま食べる」「走りながら来る」というものであり、「黙って」「座って」「走って」の部分と、それぞれ「考える」「食べる」「来る」の部分との関係は、修飾・被修飾の関係にある。それ

らの「て」は、「黙り、考える」「座り、食べる」「走り、来る」のように、上接語の連用中止形を以て無形化することが常識的には許されない。そのような「て」が「ただ並列するというぐらいの関係表示」（前掲）にあるとは考えられない。これら3例とは同用法にあると思われるが、成田徹男（一九八三）は「本をいすに座って読む」の例を「副詞的用法」と呼び、『いすに座った』結果『いすに座っている』状態を持続したまま次の動作がおこなわれるという含意」を見て取る[1]（141頁）。筆者によれば、それらは一括りにして、「て」の上接動詞と下接動詞の動作が同時並行的に進行するものの枠とすべきである。青木伶子（一九八三）には次のようにある。

・分出・内属の関係ならぬ、全く対等な語を修飾語として受け入れることは、被修飾語の能力外のことである。従ってこのやうな関係の構成には強力な結び手が必要である。同じく対等関係である連体修飾関係の場合の強力な結び手は助詞「の」であり、この動詞と動詞との間の修飾関係に於いての強力な結び手は助詞「て」である。この故に「の」も「て」も無形化（＝省略）し得ぬのである。（40頁）

つまり、動詞と動詞の修飾関係を築く「副詞的用法」の「て」は、構文上に不可欠な存在である。そのような「て」の働きは、消極的どころか、寧ろ積極的であることになる。

上記のような「て」の消極性と積極性とが如何なる連関にあるのか、以下に考える。[2]

二、「て」の意味的分類

文脈に依存するとされる「て」に、意味的に強い存在価値を示す場合があるというのには、意味用法上の違いがあると考えられる。そこで、まずは「て」の意味的分類を振り返る。森田良行（一九八〇）によれば、「て」の用法は「並列」「対比」「同時進行」「順序」「原因・理由」「手段・方法」「逆接」「結果」の8類と多様である。そのような多様性は「て」の意味的個性の乏しさの反映とも受け取れるが、私見によれば、森田の分類には若干の整理が必要である。例えば「彼女は背が高くて、目が丸くて、髪が黒いんだ」（並列）と「南の国は暑くて、北の国は涼しい」（対比）とは同用法と見ることができるし、「花瓶が棚から落ちて割れた」（原因・理由）と「大いにがんばって、仕事を全部すませた」（手段・方法）と「彼が参加して五人になる」（結果）も、それぞれ同じ用法として括ることが可能と思える（314～318頁）。

因みに『古典語現代語　助詞助動詞詳説』（学燈社）の意

味的分類は、森田の8類より少なく、次のようである（447頁、佐藤喜代治執筆）。

①事実の並立を表す。
②事実の継起を表す。
③原因・理由を表す。
④連用修飾の関係を表す。
⑤逆接の関係を表す。

森田の分類との対照では、森田の「対比」は①に含まれ、「順序」は②に対応し、「同時進行」「手段・方法」「結果」は④に集約されると見られる。[3] が、右記のように「手段・方法」「結果」を③と一括りにするならば、④は「同時進行」のみとなる。なお、④は文法上の概念であって意味的なものではない。「同時進行」は、前述の「動作が同時並行的に進行するもの」（「副詞的用法」）と同一のものであるから、④を「同時並行的な動作進行を表す」に改めれば、「黙って考える」「座って食べる」「走って来る」等は、そこに収めるべきものとなる。

そこで、右①～⑤を次のごとく修正し、本稿での分類とする。修正の結果は、『日本語教育事典』（大修館書店）の「て」の用法分類とほぼ同じものとなる（397頁、仁田義雄執筆）。

①事実の並立を表す。
②事実の継起を表す。
③原因・理由を表す。
④同時並行的な動作進行を表す。
⑤逆接の関係を表す。

右それぞれを代表する現代語での具体例（作例）を想定し、次に挙げる。「は」構文、「が」構文の別は「て」の用法とは関係しないため、特に考慮していない。①＝1、②＝2のように対応する。

1　祖父は山に行って、祖母は川に行く。
2　私は帰って寝た。
3　母が我慢できなくて泣く。
4　父が泣いて喜ぶ。
5　彼はそのことを知っていて教えない。

これらの「て」の存在意義を問うという観点では、1・2は「て」の無形化が適い、3～5は無形化できない。即ち、「て」の用法上、①②よりも③④⑤が存在価値を強くするということである。

3～5が無形化しないのは、「て」の前件と後件とが修飾・被修飾の関係にあるためである。一方、1・2は前件と後件がただ並列されており、単純な情報の移行として捉えられる。即ち、それぞれは「て」の従属節の在り様と連関している。

三、従属節としての「て」

接続助詞である「て」の構文上の役割は複文の構成にあるから、まずは複文について振り返っておく。

単一の述語によって組み立てられる単文に対し、述語によって組み立てられる構造体が複数集まって作られる文が複文である。その複数の構造体は「節」と呼ばれ、それらは、複文内の中心的構造体である「主節」と、そこに構成要素として参加する「従属節」とに区別される。益岡隆志（一九九七）によれば、従属節の類型としては「名詞節」「連体節」「連用節」「並列節」の4タイプがある。この中、「て」が関与するのは「連用節」と「並列節」である。[4]

(イ)「連用節」の「て」

『日本語文法大辞典』（明治書院）によれば、「て」は「完了の助動詞『つ』の連用形『て』が、その助動詞としての機能を薄めて接続助詞としての機能をもつに至ったものと見られている」のであり、「動詞の連用形に下接するのが本来の姿であった」（498頁、糸井通浩執筆）とされる。現代語でも「て」の多くは、動詞に下接している。

前掲「て」の用法①～⑤の中、「連用節」となるのは、まず④（同時並行的な動作進行を表す）と⑤（逆接の関係を表す）のときである

- 父が泣いて喜ぶ（＝父が泣きながら喜ぶ）。
- 彼は知っていて教えない（＝彼は知っているのに教えない）。

これらの「て」は無形化が適わない（前例は「父が泣き、喜ぶ」では意味が変わる）。しかし、次のように語順を変えても、文意はほぼ変わらない。

- 泣いて父が喜ぶ。
- 知っていて彼は教えない。

右のように語順を変えると、従属節「泣いて」「知っていて」のかかり先が主節の「喜ぶ」「教えない」から「父が喜ぶ」「彼は教えない」という主節全体へと変わる。即ち、「て」の接続先は、語の単位でも文の単位でもよい。

次に、③（原因・理由を表す）の用法を挙げる。この場合は、動詞を承けるばかりでなく、形容詞（および形容詞型助動詞）を承ける形式が確立している。

- 我が家は、停電になって真っ暗だ。
- 弟は、試合に負けたのが悔しくて寝てしまった。
- 母が我慢できなくて泣く。

どの従属節も「停電になったので」「試合に負けたのが悔しいので」「我慢できないので」の意に解することができる（前2例については、単なる並列の意に解釈することも可

能ではあるが、最後のものは無理である)。③の用法も「て」の無形化が適わないが、語順を変えて「停電になって、我が家は真っ暗だ」「試合に負けたのが悔しくて、弟は寝てしまった」「我慢できなくて母が泣く」とすることは可能である。ここでも、「て」の接続先は主節の「真っ暗だ」「寝てしまった」「泣く」という語の単位であったり、また、次のように主節全体という文の単位であったりする。

・　雨が降って、地が固まる。

文意を「雨が降ったので(降った結果)、地が固まる」という因果関係に取れば、「雨が降って」の部分は「連用節」である。この場合、「て」の接続対象は前件も後件も文の単位ということになる。

以上のように、「連用節」の「て」であるのは、前掲③④⑤の用法である。このときの「て」の接続対象は、概して、語(句)の単位でも文の単位でもよく、特定の構文形式にはならない。但し、青木伶子(一九八三)は、形容詞と形容詞の関係には並立関係のみを認めており(40頁)、形容詞を承ける「て」が後続の形容詞へと繋がって「連用節」を作ることは考えにくい。

(ロ)　「並列節」の「て」

「並列節」では、主節と従属節との関係が並行的関係になる。益岡隆志(一九九七)によれば、文と文とを並立する「て」は、「日本語の基本的な語順」に従えば、前件が従属節、後件が主節となる(4頁)。

・　父が会社に行って、兄が大学に行く。
・　姉は美しくて、妹は愛らしい。

どちらも前掲①(事実の並立を表す)の用法であるが、この用法では、「連用節」とは違い、無形化が許される。接続面では、右のような文と文との接続のみならず、語(句)との接続も果たす。形容詞を承けて後続の形容詞へと繋ぐことも可能とする。[5] なお、語順の変えが効かないところも「連用節」とは異なる。

・　氷上で踊って舞う(＝氷上で踊り、舞う)。
・　姉は、美しくて賢い(＝姉は、美しく、賢い)。
・　彼は、大人であって子供ではない(＝彼は大人であり、子供ではない)。

②(事実の継起を表す)の用法でも、①と同様のことが言える。

・　社長が帰って、部長が帰る。
・　私は帰って寝た。

どちらも無形化が許されるものの、語順の変えは効かない(後者を「帰って私は寝た」としたものは通常の表現ではない)。

以上のように、「並列節」の「て」であるのは、前掲①②の用法である。

ここに「て」は、「連用節」では用法上の③④⑤となり、「並列節」では①②となることが確認される。どちらの節を作るかにより、接続の様相で僅かに異なる面があるが、概して語をも文をも接続対象とする自由度の高さは、「て」の起源に関わるところかと推察される。西田直敏（一九九三）には次のようにある。

・日本語は、本来、活用形が接続機能を受け持つ言語であるから、原始日本語では、文と文との接続にも未然形、連用形、已然形などが用いられていて接続助詞は存在しなかったかと考えられる。（231頁）

なれば、接続助詞の持つ関係構成機能は、元は補完的・補助的なところから出発したということになる。その典型的なものに「て」を位置付けるならば、「て」のそもそもは補完的・補助的な働きをするものであったということである。

が、現代語の用法としては、助詞としての自立性を高くし、関係構成機能を強くするものが存在している。繰り返すように、「連用節」の「て」となる③④⑤（それぞれ原因・理由を表す、同時並行的な動作進行を表す、逆接の関係を表す）の用法は、無形化できず、「て」の関係構成機能が明示的である。青木伶子（一九八三）では次のように述べている。

・（用言の用言に対する関係の中、）対立的修飾成分及び対立的並立成分は「連用形＋て」によって示される。前者に於いて「て」は欠くべからざるものであり、後者に於いては欠いてもよい。（41頁、なお「対立的修飾成分」に並立するものとして「内属的修飾成分」がある。）

③～⑤の用法で「て」の無形化が許されず、①②（それぞれ事実の並立を表す、事実の継起を表す）の用法で適うのは、前者では上接語の連用中止形による意味の代用が効かないということであり、そのために「て」が構文上に不可欠の要素になる一方、後者では上接語の連用中止形で意味の代用が可能になるということである。塚原鉄雄（二〇〇二）には「接続助詞は、いわゆる重文の構成に関与する。とすれば、接続助詞の機能は、用言の中止法に類同する」（87頁）とあるが、用言の連用中止形には①②のような意味が内蔵されているということであり、そのような関係性に於いて①②の「て」は構文上に不可欠の要素にならない。

「て」の「並列節」の用法①②が補完的・補助的なものであり、いわば原初的用法であることは、それらを以て「て」

の本質とする理解を誘導するものとなる。[6]

四、「て」の本質

山口堯二（一九八〇）によれば、接続に於ける「並列性の関係には、継起性・共存性のうち、少なくともその一つが常に両立する」のであり、「並列性」の概念が「継起性」と「共存性」とを統括している。山口の「継起性」は「時間的に継起する関係の認められるもの」であり、「共存性」は「空間的に隣接共存する関係の認められるもの」である[7]（256頁～257頁）から、前掲「て」の用法②の中心的概念である「継起」を山口の「継起性」に、また、①の中心的概念である「並立」を山口の「共存性」に置換するならば、「並列節」の「て」の本質は、山口の「並列性」で把握し得る。そのことは当然、用言の連用中止形にも同様の「並列性」が内蔵されていると見ることに繋がる。

そのような前提で述べれば、「て」は、「並列節」を作る上では用言の連用中止形そのものに共通の「並列性」が存在するため、補完的・補助的なもの、または「並列性」を確認するものとなる。しかし、用言の連用中止形が「連用節」を作らない[8]ことで、「連用節」を作る上では関係構成を明確にするものへと拡張し、連用修飾関係を担うべく働く。「連用節」の「て」が無形化されないのは、連用中止形では担うことが適わない連用修飾機能を負っているからである。そこに前掲③④⑤の用法が位置付けられる。

しかしながら、補完的・補助的な「て」が低い存在価値しか持ち得ないということではなく、そこにも重要な役割を見出だすことができる。小松英雄（一九九七）は、古文での和文物語文を「連接構文」と呼び、次のように述べている。

・句節をつぎつぎと継ぎたすことによって構成されているために、後続する部分に対する関係が、必ずしも緊密でない形をとる。したがって、その構文の原理は〈付かず離れず〉である。（248頁）

・句節をつぎつぎと継ぎ足して構成される形をとるので、最後がどのように結ばれることになるのか分からない。（略）口頭言語では、ごく短い発話を除いて、話し手の脳裏に最初から整った〈文〉は構成されていないし、和文では、読み手に先が見とおせない、ということである。（同頁）

そのような文体の構成に当たっては、論理的意味関係を示すこととは別に、「連接」のための語にかなりの重要性があったと思われる。「句節をつぎつぎと継ぎ足して構成される形」（右掲）では、繋ぐ言葉として用法上の自由度が高

いものが求められ、また、重宝されるに相違ない。恐らくは、その任の重要な部分を「て」が担っており、そのような言語環境の中で「て」は利用され、発達してきたものと考えられる。山口堯二（一九九六）は、次のように述べている。

・接続形式の中でも最も文脈依存性の強い用言連用形によるそれと、最も広い句関係に適用される接続助詞「て」については、古代語以来むしろ変化に乏しい点が注意される。これらは語構成や修飾関係の構成にかかわるなど、日本語の文法構造の基底にそれだけ深く根をおろしているためであろう。（91頁）

しかし、用言の連用中止形および「て」の変化の乏しさは、語構成や修飾関係の構成よりも「連接構文」との関わりの問題として捉えることができる。

・前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深くおもしろく、山里めきて、卯花の垣根ことさらにしわたして、昔おぼゆる花橘、撫子、薔薇、くたになどやうの花くさぐさを植ゑて、春秋の木草、その中にうちまぜたり。

（源氏物語（少女）、『日本古典文学全集』）

・是につけてもうれしとおもはずして、世のはかなきことをのみおもひつゞけて、出仕のいとなみわりなくおぼえて、あはれのみ心におもくなりまさりて、おなじく北面にまいりあひ、したしかりける佐藤左衛門のりやすと、つかひのせんじを給はりて、夜のまの程に鳥羽殿よりうちつれてちぎるやう、あしたは必ことにきらめきてまいり給へ、うちつれ侍べきよし申て、七条大宮にとゞまりければ、そのあしたまいりざまにさそひければ、門に人〻おほくたちさはぎ、うちにもさま〳〵になきかなしむこゑきこえて、とのはこよひむなしくならせたまいぬ。

（西行物語（文明本）、『西行全集』）

右のように、古文には用言の連用中止形と「て」とを適当に配置しつつ、文を繋ぎ合わせていく表現形式が数多く見られる。連用中止形と「て」とが相互補完的に用いられることで古文の連綿とした文章が成立していたことを思えば、「て」の存在価値は、決して低くはなかったと推察され、そのことこそ「て」の個性を支えるものであったとさえ思える。山口堯二（一九八〇）の「て」に関する結論は、次のようなものである。

・「て」で示される最も基本的な意味関係は並列性の関係だと述べたが、二つの事態をただ並列するというのは、現実においてさまざまな意味関係にある事態の間に与えられる関係づけとしては、最も消極的・

非限定的なものでしかない。（268頁）

・しかしながら、関係表示の消極性を指摘するだけでは、「て」が接続法において担った役割を正当に評価したとはいえないであろう。「て」は、ほかならぬその消極性のために、さまざまの現実的な意味関係に対応することができたからである。接続形式として「て」が持ちえた重要性はむしろその点にあると見なければならない。（269頁）

そのような「て」の消極性が古文の「連接構文」を作るための要素として貴重な役割にあったことは強く認識されるべきであり、「連用節」を作る「て」がもはや積極的な働きに至っていることも、「て」の総体を理解する上では欠くべきでないと考えられる。

五、まとめ

接続助詞「て」は、「従属節」たる「並列節」と「連用節」を作るが、「並列節」（前掲①②の用法）は原初的用法であり、「連用節」（③④⑤の用法）は関係構成機能を明確にする用法である。原初的用法に基づき、「て」の本質は、用言の連用中止形に内蔵される「並列性」を補完・補助、または、確認するものであったとし得る。その意味では、「て」は概して消極的なものであるが、連用修飾機能を担うに於いては積極的な役割に転じているとすべきである。即ち、「て」の消極性と積極性との連関ということで言えば、「て」は元来の消極性を維持しつつ、積極性をも派生させた結果にあるということになる。また、「て」の消極性も、古文の「連接構文」を作る上では貴重なものであり、その存在価値が総じて低いものではないことも確認しておかなくてはならない。

注1　成田は、「て」の用法には「かなり連続的で截然と区別することが不可能な場合」があるともする（139頁）。

2　「て」の用法には下接語と熟合して一つの単位となるものがある。「ている」「てある」「てやる」「てみる」「てしまう」等。山下和弘（一九九六）は「（進行態として）テイル自体を一つの単位として扱う方が合理的である」（39頁）とし、野村剛史（二〇〇三）では「している」文を「存在文の一種」として「このタイプの文は、時間の中に置かれた動的なある状況を切り取っている。描写している、と言ってもよいかも知れない」（1頁）とする。これらは「て」の助詞としての働きを分析し難いため、本論では取

り上げない。

3　原沢伊都夫（二〇〇〇）では「継起的用法」の下位分類として「結果形」がある。39頁。原沢は、「て」は「純粋に接続という機能しかなく、テンス・アスペクト・ムードといった文法的な機能は持たない」ことから、前件と後件の間に様々な関係が生ずるとしている。

4　南不二男（一九七四）は、従属節（＝南は「従属句」とする）を三分類して「～ナガラ（継続）と共通した特徴を持つものの類」「～ノデと共通した特徴を持つものの類」「～ガと共通した特徴を持つものの類」を設定し、「て」がいずれの類にも現れるとする。

5　佐治圭三（一九八七）には「並列というのは文法的にいろいろな段階にある種々の単位体―語、文節、成分、文など―のそれぞれにおいて見られる現象である」（144頁）とある。

6　小路一光（一九八八）の調査によれば、万葉集の「て」（一六一五例）の中、約41・7％が事実の並立・継起を示す。但し、私見では、小路が「ある状態を表して下句を修飾する」とした例（七〇三例）の中にも、それらに当たるものが存在しており、右の数値は上昇することが予想される。

7　山口の「共存性」には「前句の事態が、後句の結果や目的に当たるという見方のできるものもある」とされる（257頁）。

8　『日本文法事典』（有精堂）に「特に、動詞の連用形は、連用修飾の働きをすることがない」（298頁、小池清治執筆）とある。

参考文献

青木伶子（一九八三）「格と格助詞」『成蹊大学文学部紀要』第18号
小路一光（一九八八）『萬葉集助詞の研究』（笠間書院）
小松英雄（一九九七）『仮名文の構文原理』（笠間書院）
佐治圭三（一九八七）『国文法講座6　時代と文法―現代語』・「文章中の接続語の機能」（明治書院）
塚原鉄雄（二〇〇二）『国語構文の成分機構』（新典社）
成田徹男（一九八三）「動詞の『て』形の副詞的用法―「様態動詞」を中心に―」『副用語の研究』（明治書院）
西田直敏（一九九三）『日本文法の研究』（和泉書院）
野村剛史（二〇〇三）「存在の様態―シテイル ニツイテ―」『国語国文』第72巻第8号
原沢伊都夫（二〇〇〇）「『て』接続形の分類」『富士フェニックス論叢』第8号

益岡隆志（一九九七）『新日本語文法選書２　複文』（くろしお出版）
南不二男（一九七四）『現代日本語の構造』（大修館書店）
森田良行（一九八〇）『基礎日本語２』（角川書店）
山口堯二（一九八〇）『古代接続法の研究』（明治書院）
――――（一九九六）『日本語接続法史論』（和泉書院）
山下和弘（一九九六）「中世以後のテイルとテアル」『国語国文』第65巻第７号